

IATSS三十周年によせて

## 思い出のスケッチをめぐって

漆原美代子 エッセイスト(環境デザイン)

交換学生としてミシシッピー大、プラッツ・インスティテュート・オブ・アーツで室内建築専攻。G・ネルソン設計事務所(N.Y.)、鹿島設計部嘱託、多摩美大非常勤講師ほかを経て現職。各省庁審議会委員を務める。著書に『インテリアデザイン』『都市環境の美学』『愛の美学』など。



IATSS会員として、はじめての研究調査に参加したのは1986年。「地方都市における街並み修景に関する研究」というあのプロジェクトの余韻は、今でも新鮮で、温かい思い出の一つとなっている。

あの時選ばれた地方都市は、藤村の詩でも知られる信州の小諸市街に、追分、海野といった旧宿場町など。伝統的な趣、街並みの残るところであった。現地では、町役場や保存対象建造物の持ち主たちとの、よき対話や出会いに恵まれてもいる。修景のために、私たちが分ち持った考え方は、文化財指定の建物とか伝統的名所の保存のみを対象にするのでは意味がないということ。つまり、それぞれの地方固有の景観美、歴史の連続性を、質、量ともに広げ、今日のライフスタイルにも親切な「環境としての街路空間」を提案する、という座標軸においても、私たちは、すぐ一致点を見出していた。

『島崎藤村の散歩道』と名づけられているコースなどを、地図に従ってエネルギーギッシュに歩きまわった夜。ちょっとヨーロッパの田舎風ペンションでの夕食後、メンバーの一員、窪田陽一先生(当時は埼玉大助教授)が、ラウンジにあったギターを奏で、私たちを驚かせたが、予期せぬロマンチックな雰囲気の中、カクテルで乾杯。一同、昼間の移動や撮影の疲れを癒し、ゆったりとしたひとときを持ったのも、つい昨日の情景のように目に浮かぶ。

討論の末、街並みの修景手法を多くの人々に理解してもらうために、言葉だけでなく、修景前の写真と修景後のスケッチを並べて発表することになり、スケッチが主に私の担当に。都市環境への「夢」があったから楽しい作業であり、懐かしく思い出すのかもしれない。

これからも、人は、自分の好きなもの、信ずることに向かって夢を見、生きていけるのではないかしら。私のスケッチも、私の夢のバリエーション。



### 東京のウォーターフロント案(1993年)

水辺にもっとも近く、林道にベンチ、カフェ、森に囲まれた比較的低い造りの屋根のある建物の配置。アーケード。小型船の発着所のためには水上のあずまや式デザイン。浮かぶボート、海と陸の上に広がる空と風の流れも考えた想像図。